

使徒言行録 20 章 17 節～24 節。パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきたのです。そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどの町でもはっきり告げてくださっています。しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」。

パウロは異邦人の諸教会から集めたエルサレム教会への支援金を携えてミレトスまで来た。パウロは五旬節までにはエルサレムに着いていたかった。3年間、心血を注いで宣教したエフェソ教会を訪ね、皆に、信仰の勧めをし、別れの言葉を語りたかったが、時間がない。そこで、人を遣わし、エフェソ教会の長老たちをミレトスに呼び寄せた。ミレトスからエフェソまでは直線距離にして、50 kmほどである。長老たちが集まって来た時に、パウロは心を込め、別れの説教をしている。

① アジア州のエフェソに来た日以来、私があなた方と共に、どのように過ごしてきたかはあなた方がよく知っているはずだ。取るに足りない自分を思い、涙を流しながら、無力さに宿るキリストの力を証ししてきた。また、ユダヤ教徒たちからの数々の陰謀に遭いながらも、主イエスにひたすら仕えてきた。パウロはいつでも、どこでも、謙遜な思いを持って、体の労苦を厭わず、言葉を尽くして、全力を注いで宣教に励んできた。

② 主イエスの福音信仰にとって大切なことを、公衆の前で、またあなた方の家で、全て伝え、教えてきた。それは、神に対する悔い改めと主イエスへの揺るがぬ信仰である。神の恵みを感謝し、主イエスの赦しの愛を喜ぶことがパウロの信仰であった。このことをユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきたと語っている。

③ 私は聖霊に促されてエルサレムに行く。そこで、私の身に何が起こるか分からないが、ただ、聖霊が行く先々の町で、ユダヤ教徒たちからの投獄と苦難が待ち受けていると告げている。パウロの命を狙うユダヤ教徒たちの企みを、いたる所で聞いたのであろう。

④ 「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」。エルサレムに行くことと決めた自分の道を走り通し、また、恵みの福音を証しする務めを果たすことができれば、この命は決して惜しいとは思わない。エルサレム教会への支援は福音を証しする務めであり、その務めを果たすため、危険を承知でエルサレムに行くと、固い決意を語っている。パウロの説教を聞いたエフェソ教会の長老たちは襟を正し、厳粛に聞き入ったに違いない。